

日本漢学を／で考える【次世代シンポジウム報告要約】

高山 大毅

前言

日本漢文部会は、二〇一〇年度の第六十二回大会に初めて設置され、二〇二二年度で十二年を迎えた。大会案内などに「日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）」と注記されているように、本部会は日本列島における古典中国語（漢文）を用いた文化営為を広く対象領域としている。発足以来、多くの充実した報告が行われ、現在、日本漢文部会は日本中國學會にとつて無くてはならない存在になっている。このシンポジウムでは、日本漢文・日本漢学に関して、近年優れた研究を発表している三氏に報告をお願いし、日本漢文部会の「現在地」を示すとともに、本部会の対象領域に関する研究の「次世代」の在り方について展望した。

各報告の内容については、報告者による要約に譲ることにして、ここではシンポジウム全体を通じて浮かび上がった問題について触れておきたい。

宋哈氏の報告は、平安朝漢文学と中国文学との比較という二項対立的な枠組から距離を取り、当時の儒者の批評基準を明らかにするものであった。これは、現在の日本漢学・日本漢文学研究の潮流に根差したものと位置付けられるであろう。「本場」中国を基準にし

て、日本の漢詩文を論評するといった見方は過去のものとなりつつある。

韓淑婷氏の報告は、近世日本における儒礼受容を考察するものであるが、右で述べたような宋哈氏の報告の視点と呼応する面が見られた。韓淑婷氏は、江戸期の儒者が儒礼の実践の際に行った改変を指摘するだけでなく、江戸末期の儒礼をめぐる議論が、「国家防衛」という当時の問題関心と深く結びついていることを示した。近世日本社会で実践しやすいように儒礼に変更が加えられた——といった単純な話ではなく、儒礼を取り巻く問題関心そのものが中国と日本とは異なっている場合もあるのである。

異なる地域・時代の文化の受容は、それが真剣になされた場合でも、パロディに接近することがあり、パロディの問題は、文化の受容の問題を考える上で示唆に富んでいる。水上雅晴氏の報告は、洒落本・落書・川柳などの通俗的な作品における中国古典のパロディについて検討したものであった。江戸期のパロディ作品は、「理知的」表現を好むという点で、宋哈氏の報告で取り上げられた平安期漢詩文の特徴と類似する。また、科挙制度のない近世日本社会において、いわば「士大夫になる」といった問題関心を離れて中国古典がどのように享受されていたかを考える上でも興味深い事例であつ

た。

時間の制約もあり、議論を深めることが出来なかった論点もあったが、本シンポジウムを通じて浮かび上がった問題が、「次世代」の議論を喚起することを願うばかりである。